

## 研究活動一覧（第31輯）の刊行に際して

2004年4月にスタートした国立大学法人は、6年間の中期目標期間のほぼ3分の2を経過した。国立大学法人は、2007年度までの教育・研究と管理・運営を自己評価し、その自己評価に対して、最初の中期目標期間の法人評価を受けることになる。法人評価は、国立大学法人の教育・研究と管理・運営一層の改善と向上が目的とされているが、今回の法人評価の結果は、次期中期目標期間の運営費交付金の増減に反映される。研究活動は、部局ごとに他の大学との比較が比較的容易であることから、レベルの維持と向上が他の項目以上に求められる。

研究活動一覧（第31輯）は、富山大学杉谷（医薬系）キャンパスの各講座・研究室等の2007年の1年間の研究業績を纏めたものである。本研究活動一覧は、杉谷キャンパスにおける各講座・研究室等の単位ごとの研究活動の現状を把握するための重要な資料である。最近、個々の研究者の独立性を高める流れが大きくなりつつある。昨年4月にスタートした准教授と助教もその流れの中にある。講座・研究室の閉鎖性による弊害を除去するには有効な流れではあるが、一方で、個々の研究者の独立性が高まりすぎると、必ずしも研究の活性化に繋がらないことも明らかになってきている。杉谷（医薬系）キャンパスの研究活動の継続的な向上を図るためには、各講座・研究室ごとの研究活動のレベルを知ることが大切である。

富山大学では、教員の教育、研究と社会貢献に関する教員総合データベース（仮称）の準備が進められている。このことを背景に、研究活動一覧（第31輯）の刊行のためのデータ収集に当たり、その是非に関する議論が巻き起こった。教員総合データベース（仮称）は、教員個人の情報を集めるものであり、このデータベースから、各講座・研究室等の単位毎の研究業績を直接把握することはできない。研究活動一覧（あるいはデータ集）を今後も継続的に作成するのであれば、早い時期に、必要なデータ項目が教員総合データベース（仮称）に準備されているか否かの検討が必要になる。

この研究活動一覧の継続的な刊行が、各講座・研究室等の研究の一層の活性化に繋がることを期待する。

杉谷キャンパス担当理事 倉 石 泰

附属図書館長

Kuraishi Yasushi